

桑名城開城

西 羽 晃

慶応4（1868）年1月11日、前藩主夫人の珠光院の意向で桑名城を開城することに決した。開城の事前交渉に家老の酒井孫八郎は追われることになる。酒井は12日早暁に帰宅して、小休止してから登城。家老一同が署名した恭順の嘆願書を尾張藩へ届けた。この時の尾張藩では抗戦派が勢力を占めており、歎願書の受取りを拒んだ。

桑名へ新政府軍が攻めてくる恐れがあるため、城内では重要書類を焼き捨てたり、米蔵では米の引き取りで混雑した。城下でも大混乱となり、町人たちは貴重品を郊外へ疎開させたりした。法盛寺では御本尊を梱包して赤尾の浄光寺へ移した。仏眼院では不安になった人たちが集まって来て、話し合っており、ゆっくり寝ることも出来ぬ有様となった。

新政府は幕府を武力で壊滅するため、関東へむけて軍隊を派遣してきた。東海道を進んできた新政府軍の橋本実梁総督は19日に坂下まで来た。酒井は総督に会うため、19日夕刻に桑名を出て、20日早暁に亀山へ到着した。此处で亀山藩を通じて恭順の嘆願書を新政府軍に提出した。22日に返答があり、23日に四日市へ出頭するように命じられた

酒井は23日朝6時ころに桑名へ戻り、前藩主の遺児である万之助や家老一同を連れて、同日夜に四日市へ着いた。四日市宿の清水本陣に居た橋本総督に万之助は頭を下げて降伏した。橋本総督から「桑名城を引き渡すこと、桑名藩士は寺院に立ち退くこと」を命じられた。そして万之助は四日市川原町の法泉寺に幽閉された。

酒井は夜半に四日市を出て24日早朝に桑名へ戻り、直ちに城の明渡しと藩士たちの立ち退きを指示した。25日は珠光院ら藩主家族が照源寺へ立ち退き、鎮国守国神社のご神体と藩印は城内から長寿院へ移した。27日には藩士一同が自宅を出て、本統寺・長寿院・照

源寺・輪（正しくは車偏でなく舟偏）崇寺・海蔵寺・常信寺へ退去し、家族はそれぞれの縁がある先に移った。ただし下級武士は家族ともども自宅で謹慎した。

28日に橋本総督ら新政府軍の一行が桑名城に入った。城の鍵と図面が引き渡れた。新政府軍は城の東南隅にある辰巳櫓を焼き捨てた。

無血開城であるのに、新政府軍は攻め滅ぼして落城させたしるしとした。これ以後の桑名は新政府の支配下となり、尾張藩と津藩が管理することになった。尾張藩は法盛寺を宿所とした。酒井は29日の日記に「雨」の1字のみ書いている。酒井の無念さと疲労が伝わる。酒井は元旦からの29日間に自宅ゆっくり寝たのは僅かであり、四日市や亀山から夜を徹して帰ってきたこともあった。満22歳の青年将校といえども心身ともに疲れ果てた。



辰巳櫓の跡には現在大砲が置かれているが、大砲の由来は不詳